

吉田富夫 杉原荘介 1937 「尾張天白川沿岸に於ける石器時代遺跡の研究（1）」

『考古学』8-10

中山英司 1955 『入海貝塚』 愛知県東浦町文化財保存会

増子康真 1976 「名古屋市鳴海町銚ノ木貝塚の研究」『古代人』32 名古屋考古学会

秋本真澄 1983 「箱根西麓採集の縄文早期末葉の土器」『駿豆考古』25

戸沢充則 1955 「樋沢押型文遺跡」『石器時代』2

5. 発掘調査の総括 一 岳南地域の縄文時代早期前半の様相を予想して一

本地域、いわゆる富士岳南地域における縄文時代早期前半の様相は昭和54年～57年、西富士道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査が実施された若宮遺跡、つまり『若宮期』に表象される。ここで得た表裏縄文、縄文、撚糸文、押型文などの土器片は15,000点以上に及び、石鏃2,168点をはじめとする多種多量の石器類、また、それに覆われて竪穴住居跡28基、炉穴跡60基などからなる大規模な集落景観はかつて例がなく、従来の常識を覆すに充分な結果であった。

しかし、それに後続する沈線文土器群を伴出する時期、代官屋敷、上石敷、沼久保坂上、それに黒田向林遺跡などが順次、整備、編成されていくなか、若宮遺跡は多岐にわたる内容の複雑さも相まって依然として孤立したまま、暗中模糊の状況にあった。

この時、このたびの静岡県富士土木事務所をはじめ、地元関係諸氏の埋蔵文化財に対する積極的なご理解とご協力をもって実施された県道富士宮芝川線道路改良に伴う埋蔵文化財発掘調査、小松原A遺跡で得た成果は前章に記すように多大で待望久しく、若宮遺跡の歴史的価値を助長するに充分に足りるものであった。

以下、ここにその成果を整理、羅列して本地域の縄文時代早期前半の様相を予想しながら本調査のまとめとしたい(図-13)。

それではまず、沈線文土器を伴出する一群を観察して、若宮期の実相をはっきりさせておきたい。

- ・押型文が施される土器（以下、押型文土器）は格子目文が明瞭でなくなり、わずかながらの山形文を引きずって楕円文が目立つ。以後、山形文が消滅して楕円文の乱雑、粗大化が始まる。
- ・撚糸文が施される土器（以下、撚糸文土器）は走行の断絶、乱走による余白（無施文）・交差部分の格子目化が生じて規則性を欠く。それは縦位に1～2回転後、断絶して横にずれるから、撚糸文本来の垂下の意識も失ってくる。また、大型の格子目、ないしは網目状の撚糸文が発生して、菱形押型文と同化が図られる。
- ・縄文が施される土器（以下、縄文土器）または無文の土器（以下、無文土器）は比較的小となしいが、いずれも上記土器と同様に以下の特徴をもつ。

- ・口唇部に刺突、押圧による「刻目」が発生して、異系であるはずの高山寺式土器特有の螺旋施凹線が撚糸文土器、さらに無文土器まで浸透する。
- ・これに呼応して口縁部は大きく外反して、その表裏、とくに裏面に施文を意図すればなお、必然的な器形であって、これ、つまり「朝顔」、「チューリップ」状を呈した尖底土器が前段階より連綿としていることに気付く。
- ・なお、波状口縁の発生、繊維の含入は無論である。

以上をもって、若宮期が後出土器群と画期されるが、適当な併行関係を有する型式、様式（小林達雄 1966）が見当たらず、ここでは多縄文系土器群終末、柁の湖Ⅱ式段階をいま一方の画期として、その間を第Ⅰ～Ⅲ段階に羅列しておきたい。

柁の湖Ⅱ式の段階

本地域の初源である。

- ・縄文土器は表裏全面、ならびに口唇部におよそLR縄文が施される、いわゆる表裏縄文土器で、器高、口径をほぼ同じくして、丸底から内湾気味に立ち上がり口縁部を拇指状に折る。これが祖形か、以後、口縁端部の肥厚はまったくない。なお、胎土に多量の金雲母を含んで特徴である。
- ・撚糸文土器は明確でない。

若宮期の第Ⅰ段階

- ・縄文土器は前段階より継承される表裏縄文が次第に口縁部の表裏（この場合、表面は全面施文である。以下同じ）に集約されて外反もきつくなる。また、口唇部施文に執着して拇指状の口端が角頭状に変化を始める。金雲母の含入は相変らずだが量は減る。
- ・撚糸文土器はこの段階ではっきりする。これには直立する口縁部の表裏、ならびに口唇部に撚糸文が施されて、施文具（絡条体）の軌道にしたがい鋭角的に外に折れるものと、大形の「砲弾」状尖底で厚く粗く、口唇部が丸頭状を呈して、それと口縁部裏面に施文意識のまったくないものをみる。

後者の撚糸文は粗くきつく施されて、口縁部を横位に^{●●●●●}一帯、以下縦位に垂下して特徴で、これが絡条体の斜行による軌跡であることは言うまでもない。なお、口縁部が外反して、おそらく「朝顔」状尖底も登場するが、いずれも繊維を含まないことで共通する。

- ・押型文土器はおそらく出現していない。

若宮期の第Ⅱ段階

- ・縄文土器は「朝顔」状尖底が口縁部の表裏、および口唇部の施文を踏襲して、とくに口唇部がはっきりして角頭状がきつくなる。それに厚手で粗い、節、条の大まかな縄文が出現して、縦位に羽状を描出するものもある。

また、縄文は「砲弾」状尖底に波及して、ついに口縁部裏面にも浸入する。しかし、後述する撚糸文、押型文土器と同様に口唇部施文は拒絶するらしい。施文（表面の施文を言

う。以下同じ）は縦位が一般で、まれに口縁部を横位に、以下、縦位の例もあるが、これらはいずれも繊維を含んで、前段階と区別される。

- ・撚糸文土器は「朝顔」状尖底がはっきりせず、「砲弾」状尖底を保持して口縁部裏面の施文を許容する。撚糸文は細く、浅く施されて、絡条体が縦位回転するため軌跡が斜行気味となり、その垂下意識が薄れる。また、除々に「手ぬき」もされるらしい。繊維は一様に含まれる。
- ・押型文土器はこの段階で一気に台頭して縄文、撚糸文土器を超える。格子目文、山形文は相譲らず、楕円文（小粒）が従うが、その先行は明らかでない。

とくに「砲弾」状尖底が目覚ましく、この『「砲弾」状尖底押型文土器』が若宮期の主力で、本地域の特徴的な押型文土器となる。施文は口縁部裏面を横位に一带、表面を縦位に、が圧倒して縄文、撚糸文土器と同様であり、これがそれらよりの受動の結果であれば、その能動体は前段階に出現する「砲弾」状尖底撚糸文土器か、今後の判断が待たれる。

とすれば、現在、格子目文に限られる「朝顔」状尖底は口唇部施文も手伝って、あくまで信州的色彩（立野）が強く、ひいては近畿地方（神宮寺、大川）との関連まで取り沙汰されてしまう。なお、やはり繊維は含まれて、以後その含入は不変となる。

若宮期の第Ⅲ段階

- ・縄文土器は「朝顔」状尖底が連綿として、口縁端部の角頭状はなおきつくなる。反面、施文は口唇部に規制がなくなり、口縁部裏面も曖昧となる。表面は縦位に余白をもって下り、一種の帯状効果も生むが、全般的に主体性に欠けて、その余白のあり方は施文の倦怠を感じる。また、縄文は節、条の大まかなものが器形に引きづられるが、細かなものは目立ず、さらに「砲弾」状尖底は消滅するらしい。
- ・撚糸文土器はやはり、口縁部一带（付近）の施文が曖昧となりつつ、絡条体の縦位回転で描出される軌跡の斜行を走行の断絶で修正する行為が現われる。これが余白と相まって帯状効果を意図した、「帯状施文押型土器」の受動形か、いわゆる「手ぬきの方向性」の同類行為か計り知れないが、走行の断絶は撚糸文の垂下意識もなくして横にずれ始めてなお、余白を増す。さらに規制の緩和から乱走も始まる。なお、この「撚糸文の横ずれ施文」はそれ以降、高山寺式段階の撚糸文が施される土器に見出せるから、その出自を探るポイントのひとつとなろう。また、ここでは「砲弾」状尖底の残影もみるが、それはおよそ第Ⅱ段階で消滅して、以後、「朝顔」、「チューリップ」状尖底の全盛となる。
- ・押型文土器は続いて優位を保ち、極端な強制はないが、伝統の口縁部一带（付近）の施文でその外反を強めて、さらに衆知の、いわゆる異方向帯状施文が発生して一層信州的色彩（樋沢）を増す。とくにここでは山形文が主体で、一部、格子目文、楕円文が従うが、格子目文が存在を失うのに対して、楕円文は勢いを増して、これ以降、得意の横位密接施文（細久保）で包括していく。

ここで若宮期は終焉をむかえる。しかし、その編成作業はいまここが端緒であって、今後の資料の集積、詳細な観察、修正をおおいに期待しておきたい。

なお、最後になりましたが、調査の完遂に際しまして、ご援助、ご指導をいただきました静岡県富士土木事務所、同県教育委員会、地元関係者の皆様には心よりお礼申し上げます。

- 紅村 弘 1974 『杣の湖遺跡』 岐阜県恵那郡坂下町教育委員会
小林 達雄 1966 『多摩ニュータウン遺跡調査報告Ⅱ』 多摩ニュータウン遺跡調査会
松島 透 1957 「長野県立野遺跡の捺型文土器」『石器時代』4
戸沢 充則 1955 「樋沢押型文遺跡」『石器時代』2
松沢 亜生 1957 「細久保遺跡の押型文土器」『石器時代』4
浦 宏 1936 「紀伊国高山寺貝塚発掘報告」『考古学』10-7
赤星 直忠 1936 「古式土器の一形式としての三戸式土器に就いて」『考古学』7-9
同 1935 「横須賀市田戸先史時代遺跡調査」『史前学雑誌』7-6

注1 富士宮市関係縄文時代早期報告書

- 野村 昭光 1969 「富士宮市大場山出土の縄文土器」『駿豆考古』8
同 1970 「富士宮市代官屋敷遺跡出土遺物について」『駿豆考古』9
小野 真一 1975 「富士周辺における縄文早期の土器」『熱海市ゆずり葉遺跡発掘調査報告書』 加藤学園考古学研究所

- 富士宮市教育委員会 1982 『代官屋敷遺跡』 日本道路公団名古屋建設局他
同 1983 『若宮遺跡』 日本道路公団名古屋建設局他
同 1985 『上石敷遺跡』
同 1985 『沼久保坂上遺跡』
同 1986 『黒田向林遺跡』

注2 本地域の縄文時代早期前半の様相については、とくに静岡県東部地域から東海、関東、さらに近畿地方と、汎日本的な視野に立った下記の精力的な編成、集成に負うところが大きい。

- 伊藤 昌光 1983 「第Ⅳ章 調査総括 第1節 遺物の検討 2土器について」
『若宮遺跡』日本道路公団名古屋建設局他
関野 哲夫 1988 「東海地方における押型紋段階の様相」『縄文早期を考える—押型文文化の諸問題—』帝塚山考古学研究所
同 1988 「高山寺式土器の編年—その細分と西日本地域との関係について—」
『先史考古学研究』1